那須頼雅氏を送る

——馬蹄型の回帰——

松　山　信　直

戦後の学制改革で新制大学が誕生したとき，同志社大学には全学の１・２年生を収容した教養学部ができた。那須頼雅氏はその教養学部を修了して，３年次から英文学科に進み，1957年３月に文学修士になられたが，そのときすでに長崎外国語短期大学の助手として1954年から奉職されていた。那須氏は1962年に同志社に迎えられ，爾来本年３月まで30年にわたって，英語教育に専念してこられた。その間，英語科主任をはじめとして，英語の様々な役職につかれ，さらに所属した商学部の教務主任，大学評議員などとしても活躍された。授業においても，英語だけでなく，商学部の一般演習，ゼミ，英文学科の演習なども担当されたが，那須氏は大学内にのみ引きこもったり，自分の研究に閉じこもることなく，広く学外においても活躍され，日本アメリカ文学会の関西支部の幹事，評議員，全国の本部幹事として献身的に学会業務に携わり，1991年４月に同志社大学に本部事務局が移ってからは，文字通り日本アメリカ文学会の要となってこられた。

だが，那須頼雅氏の学会への真の貢献は，Mark Twain の研究にある。那須氏は40年近くにわたって，このアメリカの代表的作家と取り組んできた。若い頃 Sherwood Anderson や，J. D. Salinger に手を広げたこともあったが，Mark Twain に一貫して深い愛着と鋭い洞察をもって接し，その成果は20数編の論文，10数回の学会発表，数冊の英語教科書，数点の翻訳，書評として現れた。那須氏の代表的研究業績は，なんといっても，曲がりくねって流れるミシシッピー川の馬蹄型のパターンで Mark Twain の小説を解明

した『マーク・トウェン論究—「大愚」の遍歴」』（篠崎書林，1978），本邦初訳の『金メッキ時代』上下（山口書店，1980），さらに，Mark Twain の代表作であるばかりでなく，アメリカ小説の古典ともいえる *Adventures of Huckleberry Finn* の，いわゆる "raft episode" を復元した完本の注釈書（山口書店，1986）である。これらの業績は，日本における Mark Twain 研究に大きな足跡を残すものだが，那須氏の永年の研究の積み重ねであると同時に，二度にわたって得た在外研究の機会や国内留学を有効な資としたもので，在外研究・国内留学のありかたを示す一つの規範を我々に示したといっても過言ではない。

「トウェインの一貫した作家信条とは，『わたしどもは，変化する，たえず変化する，生きているかぎり，変化しつづける』ことだ」と那須氏は書いている。最近の那須氏の関心は，ある特定のマクロ的テーマ，例えば，"money" "南北戦争" "土地" "川" など，でもって Mark Twain を少し別の角度からとらえようとする方向に変わってきたように思える。これらの研究が再び一巻にまとめられる日がくることを大いに期待したい。

私は那須氏の専門に比較的近い関係もあって，那須氏の業績のかなり多くのものに，原稿の段階から接する機会に恵まれ，多くを教えられ，多大の示唆を得たりもしてきたが，その一方で，こよなく美酒を愛した那須氏と，日暮てのち席を同じくすることや，学会出張をともにする機会も少なからずあった。いかに深更になっても，朗らかさを失わず，人に巧みに酒をすすめ，話題を欠くこともなく，呂律も乱れない那須氏は，Mark Twain の作品に出てくるエネルギッシな語り手を彷彿とさせる。「エネルギーを欠く人間は何か？　無だ。完全な無である。」という Twain の言葉を，那須氏は日常においても拳々服膺しているように思える。

さらに，ユーモアを特色とする Mark Twain にふさわしく，那須氏の身辺にはユーモラスなエピソードに事欠かない。だが，那須氏の明るい，現実肯定型のおおらかさは，晩年ペシミスッティクに傾いたキリスト教徒の

Mark Twain を超えるもので，仏教の神髄を会得して達観を得た禅師に近いものというべきだろう。それは仏門の一家に生まれ育った那須氏の天賦かもしれない。この一家は兄弟三人が同志社の英文学科に学ぶという希有の一家だが，その上の兄を沖縄戦で失った。昨年，琉球大学で日本アメリカ文学会の年次大会が開かれたとき，那須氏は大会の煩瑣な仕事を終えた後，沖縄で散華したこの兄の戦跡を訪れた。そこには今まで見かけたこともない厳しい厳粛な仏教徒の那須氏の顔があった。

このたび，那須頼雅氏が定年にならないうちに同志社大学を去られたのは誠に残念だが，学究の徒としての那須氏が評価され，設立いまだ日の浅い神戸女子大学の大学院において，これまでの研鑽の成果を学生に与える機会を得られたことをむしろ喜びたい。それは那須氏の良い意味での「遍歴」であり，研究者・教育者としての初心に回帰する馬蹄型のパターンを描くものかもしれない。体調をいといつつ，新たなチャレンジにいそしまれることをひたすら祈念したい。